

「霊が見える」という現象の事例報告と その批判的・現象学的検討

山 根 一 郎*

A case report of the phenomenon of “seeing spirits” and its critical and
phenomenological examination.

Ichiro YAMANE

1. 「霊が見える」ことを研究対象とすること

実社会で普通に生活している人の中に、「霊が見える」と言う人がごく低比率ながら存在している。例えば、吉本芸人であるシークエンスはやとも氏は、芸能活動をこなしながら霊が見える経験についての著作を出している(2020a, 2020b)。ただし、一般の間では、霊が見えるという経験を隠して生活している人が多いようである。なぜなら、そのような経験はありあえないものとして真摯に受け止められないためであろう。彼らの証言を認めるならば、彼らの「霊が見える」という経験はいかなる現象なのか。本稿では、この「霊が見える」という経験を真摯に受け止め、学術研究の俎上に載せることを目的とする。

1.1. 本研究の基本スタンス：批判的かつ現象学的¹⁾

本稿では、精神・神経疾患のない健常者における「霊が見える」という経験について、批判的かつ現象学的に取り扱う。批判的にとは、「霊が見える」という主観的経験についての言明を素朴に信じることはせず、あえて（方法論的に）可能な限り疑ってかかることである。その際、科学的に説明可能な論理を優先し、それで説明可能であれば、本研究はそこで終了する。

現象学的にとは、この経験すなわち現象に対して、「霊が実在する証拠である」という立場のみならず、「錯覚か幻覚に決まっている」という（既存の科学で説明できないものはその現象の存在を認めない）立場にも立たず、すなわち結論を事前に用意（予断）することなく、その現象がいかに経験されているか、その現象の“現れ”をできるだけありのままに記述する態度である。現象学でいう“現象”とは経験のことであり（何人にも経験されえない現象は現象として把握されえない）、人間の認知過程を必ず経由する現象という意味で“心理現象”に等しい。

* 人間関係学部 心理学科

現象学的スタンスでは、事実として認めるのは経験された現象のみで、経験の外に客観的世界が実在することを前提としない。したがって霊の“経験”を認めることが霊の“実在”を認めることにはならず、同時に、霊は客観的世界では実在しないという結論もたない。霊が実在するか否かの議論は、本研究の範囲外であり、むしろその議論は、霊の経験という心理現象の検討の後になされるべきである。言い換えると、科学的に実在が認められていない事柄であっても、それについて心理現象が存在するなら、心理学の研究対象として認める立場をとる。

以上より、本稿は、「霊が見える」という心理現象（経験）が、いかに経験されているかを、錯視や幻視の可能性と照合して記述していこうとするものである。

1.2. 関連概念の整理

まず「霊が見える」という現象について、本稿で扱う内容を明確にし、それに即した用語を選択する。この現象を Husserl の現象学の基本概念であるノエシス（志向作用）とノエマ（志向対象）に分解すると、「見える」というノエシス、「霊」というノエマに分かれる。

a) 霊が「見える」とはどういうことか

「霊が見える」という現象を学問的に扱うに当たって、まずはその現象を術語化したい。既存の熟語でもっとも近いのは「霊視」という表現である。これは「霊を視る」の熟語化として意味論的には問題なさそうだが、実際の霊能者たちの使用、すなわち語用論的には、「霊視」は自身の霊能力を使って霊や人の過去・未来を見る、すなわち「霊（力）で見る」という意味でも使われていて（この場合は「霊視する」という表現になる）、さらに霊を視覚対象ではなく内的表象（イメージ）として現れる場合も含まれる（例えば美輪, 2004）。また霊が見える人を「視える人」と表現されており、そこから「視える」という表現が抽出できるが、かえって表現が一般的すぎるため術語としては採用し難い。ちなみにこのような霊視現象は日本に限ったことではなく、たとえば台湾では陰の世界（幽冥界）と陽の世界（人間界）の両方を見る眼という意味で「陰陽眼」と熟語化されている（伊藤, 2007）。「陰陽眼」は語意としては本研究の主題に適しているが、日本語としての「陰陽」は先の両界の含意性に乏しい。そこで本稿では、「霊」がイメージ的ではなく、視覚的（visual）に外在対象のように見える経験に限定するため、多義的な「霊視」の代わりに「霊視覚」と表現する（内的表象も含める場合は「霊視」）。そして霊をイメージ表象するのではなく、他の視覚対象と同じように視野に認めることを「視認する」もしくは「見る」と表現する。

b) 対象としての「霊」

霊視覚の対象である「霊」は、何をもって霊とされるのか。霊の視認であるから、実在他者の視認との識別が重要となる。この問題こそが本稿の主要関心事であり、その実例を後章で紹介するが、結果的には視認者が霊と判断したものを指す。その判断基準は一般的には、生きている存在者とは異なる、その場にいるはずのない、あるいは生命体としては存在し得ない様相で視認される対象である。ただし本稿の事例には含まれないが、明確な

視覚対象とならず、気配としてのみ存在が感じられる場合もある。いずれも外在する視覚対象としての人間と、いずれかの点で“見え方”（ノエマ成分）が異なる。ただしその正体が何であるかという議論は本稿の範囲外である。以下、本稿では、霊という表現をこの規定に基づいて用いる。

c) 霊視覚者

上述した意味での霊視覚ができる者を「霊視覚者」と表現する。実際の霊視覚者は、従来の怪談話にあるような、本人に因縁ある死者（親族・知人）の幽霊に遭遇する者、すなわち幽霊側が化けて出たい相手ではない。霊視覚者は、自身とは無縁の霊を、幾多の場所で、数多く、実在他者のように鮮明に見る。雑踏の中で実在他者たちに紛れている霊を見いだすことも多く、同一視野の中で実在他者と霊とを識別できる。

霊視覚者のこの視認能力について、台湾の陰陽眼においては、先天的に見える人と、事故などを契機に後天的に見えるようになった人がいるという（伊藤, 2007）。言い換えれば、修行などの意識的努力による習得はできないようである。また陰陽眼（霊視覚者）に共通するのは、霊は見えるだけで、霊に対して“祓う”などの影響力は行使できない点である。これは日本でも「見える人」と「祓える人」は別であり、「祓える人」は修行によって習得可能という（加門 2007, 伊藤 2018²⁾, シークエンスはやとも 2020b)。

1.3. 霊視覚であることの判定基準

ここでは、霊視覚現象の採用について考慮すべき点を一般論として述べる。霊視覚現象に対して、まずは批判的スタンスで接する。すなわち、霊視覚現象の報告を、霊ではない他の現象（経験）としての解釈可能な場合、霊視覚とは認めない。優先する他の現象とは、錯覚（錯視）および幻覚（幻視）である。そのため、「一瞬、霊らしきものを見た」という不確実な経験は錯視（誤認）の可能性が高いため、元より霊視覚と認定しない。明瞭、持続、反復という確実な視覚経験を認定条件とし（最低1つ、重なっているほどよい）、さらにそれらの霊視覚対象を描画できることを条件に加える。

a) 虚言でない

霊視覚と認定する上で、まず避けなければならないのは、見えてもいないのに見えたと報告する虚偽報告である。これが霊視覚研究の第一関門であり、最も重要である。なぜなら、世間に出回るこの種の報告には虚言の可能性が高いものが多いためである。言い換えれば、あえて虚言を弄してまで霊視覚が言明される場合がある（自称“霊能者”に多い）。その動機として、虚言することの心理的報酬（快）あるいは虚言が期待される状況が考えられる。

前者の動機は他者から注目（特別視）を浴びたい欲求からきている。その欲求が特に強いのは、演技性パーソナリティ（障害）やヒステリー・顕示性性格などにみられる。これらの性格特性に由来する虚言癖は、本人自身が虚言を信じ込む傾向にある（嘘をついている後ろめたさがない）ため、かなり真に迫った創作をする。それ以外は日常会話も正常であるため、関係が浅い段階ではこの虚言癖を見破りにくい。これらの虚言は冷静に考えれば非現実的な大言壮語である。尤も、非現実性のチェックは対象が霊の場合は困難であ

る。ただし性格に由来する虚言癖の場合、虚言は霊視に限定されないことから、そのチェックは可能である。

本人の性格特性以外の虚言要因として関係的要因もある。たとえば、本人の会話相手が、霊について強い関心があるため、その相手の関心を惹きつけるあるいは肯定的評価を得るために、霊視の虚言を弄する場合である。この要因については、関係や会話の文脈を客観的に振り返り、本人にそのような動機を与えていないかを確認する。以上の虚言可能性のチェックをクリアして、霊視覚報告が確かな経験を述べたものと判断できるなら、次の確認に入る。

b) 錯視でない

壁面のシミなどが人の顔に見える錯視（誤認を含む）は多くの人が経験する。ただし、一瞬誤認しても、繰り返し・長時間見ていることで誤認は解けるが、“見え”そのものは変化せず、霊のように一定期間見えて、その後見えなくなるという現象にはならない。また「Müller-Lyerの錯視」や「Kanizsaの三角形」などで経験される生理的錯視の場合は、一部の霊視覚者だけの経験ではなくなる。

ただし、錯視は、客観的には存在しない形態が日常経験の中で視認される現象として、霊視覚のような不思議な現象に近縁の現象であることには変わらない。たとえば、霊視覚に近い現象として「オーラ（aura）視」がある。オーラは、人体の周囲に光が広がって見える現象で、霊視覚とは異なる現象だが、通常は見えないものを見るという点で、すなわち非日常的知覚能力の発現である点は共通している。オーラ視は訓練によって見えるようになるという、ある教本（Andrews, 2005 伊藤訳 2007）によるその方法は、心理学的には残像視（補色残像を含む）の訓練にほかならない。残像視も確かに存在していないものが見える生理的錯視であり、それがオーラ視に結びつくなら、オーラ視は残像視と共通のメカニズムをもつ視覚現象かもしれない。そして霊視覚とオーラ視とが関連するなら、霊視覚と残像視（錯視）との間にも関連性があるかもしれない。

c) 幻視でない

霊視覚が外界の視覚対象の誤認や錯視でなくとも、幻視（視覚における幻覚）である可能性が残る。ただし学術的に認められている幻視は病理的原因によるものであり、健常者は日常では経験しない。本研究でも、最初から以下の幻視と解釈できる場合は採用しない。

①病理的幻視：脳の機能障害による

幻視は病理現象、すなわち統合失調症あるいはアルコールを含む薬物の影響における精神障害、あるいはてんかん、パーキンソン症候群（レヴィー小体認知症を含む）、偏（片）頭痛、半盲（視野欠損）、ナルコレプシーなど視覚系を中心とする神経障害や意識障害によっても発生し、そのうち当人によって霊視覚とみなされるのは、ナルコレプシー患者におけるマイクロスリープ（微小睡眠）時に見る幻覚が多いという（Sacks, 2012 大谷訳 2014）。これらの障害は幻覚以外にも顕著な症状があり、また幻視内容も霊に限定されないため、病理的な幻視であることは把握されやすい。専門医による診断も得やすく、発症初期を除けば、霊視覚との識別は可能である。

Ramachandran (1998, 山下訳 1999) によると、トップダウン（中枢由来）の想像で喚起された活動性としての幻視は、本来的には常に発生可能であるという。それが日常で抑制されているのは、網膜に対象物が何も飛び込んでいないことを高次の視覚野に知らせる網膜・初期視覚路の基準信号によるもので、その経路が損傷されるとこの基準信号がなくなるため幻覚が生じるという。すなわち、健常者においても幻視は本来的に可能だが、抑制機構が作動しているために経験しないということである。

②非病理的幻視：開眼夢

では病理をもたない健常者が幻視を経験することはあるのか。まず健常者が毎晩見る夢は幻視を含む幻覚である。ただし夢は睡眠中に限定されており、覚醒時は幻覚を見る能力（機構）が抑制されているとみなせる。

睡眠と覚醒という心身が質的に異なる状態の間には、その移行段階があり、特に覚醒から睡眠に至る入眠時に、微妙な移行現象（入眠時幻覚、金縛り等）を経験することがある。その移行現象の1つとして「開眼夢」を紹介する。これは筆者が過去に一度だけ経験したもので（山根, 2020）、その際に命名した。それは、読書中に睡魔に襲われ、開眼していながらごく短時間夢見をした経験である。普段は読書中に睡魔に襲われると閉眼して軽い睡眠に入るのだが、その時は開眼した状態で夢が出現し、網膜像である書物の文字面と夢の映像とが視野上で二重写し状態になった。この時の夢は、入眠時のノンレム睡眠での夢と同じくストーリー性のない風景的な静止画で、動きも音も伴わない簡素なものであった。その時の夢画面は、外界の視覚像とは独立して視野に映されていて（例えばAdobe Photoshopのレイヤー構造を使って背景画像に別の画像の透明度を上げて重ねた状態に等しい）、半透明ながら、映像の精細（リアル）度は外界像に匹敵するほど高かった（覚醒時での任意に構成可能なイメージ表象のような低精細で高透明度ではない。夢映像の高精細性を確認できた貴重な経験でもあった）。このような「開眼夢」という現象を紹介することで、健常者による幻視の経験可能性を示しておきたい。

それ以外には、山中での疲労時あるいは過酷な修行時のような、特異な空間での疲労状態で幻視を含む幻覚が発生する事がある（筆者の山での経験では、錯視も伴い、山中にありもしない人工構造物を見た）。ただし登山をすれば誰でも経験するものではなく、また（筆者を含む）山での幻視経験者が下界の生活空間で同様な経験をするものでもない。以上のように、健常者が幻視を経験するには、特殊な条件が必要といえる。

d) 信念との関係

錯視や幻視も含めて霊を見やすくする心理的要因として、霊の存在を信じるという信念（トップダウンルート）は影響するだろうか。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という句があるように、瞬間的な錯視・誤認や曖昧形態の推論・解釈には影響しそうである。ただし既存の霊視覚者は、霊の実在を信じていたために霊が見えたわけではないという（柳澤, 2010）。霊の実在を信じていることで霊が見えるなら、現実にはもっと多くの霊視覚者が存在してもよく、前近代においては大多数が霊を見たはずである。知覚と信念との関係というなら、むしろ霊魂が見えないのにその存在を信じていることの方が不思議な心理現象である。また、信念が知覚に影響する論理を使うなら、霊が見えない人は、霊を否定す

る信念によって霊が見えることを否認（見ないように）している可能性もある。

e) 霊視覚者の視覚能力

霊視を、錯視でも幻視でもなく、通常の視覚現象とした場合、霊視覚者は特別な視覚能力の保持者ということになる。昨今の心霊言説の世界では「霊は波動が異なる」という表現がされるが、霊が通常の可視光域内では見えず、その外側の周波数帯で捕捉されるなら（その場合、広帯域の電磁波計に反応する可能性があり、実際に電磁波計が霊の探知機として使用される）。霊視覚者は可視領域が広いのか。いずれにせよ、霊視覚者の視覚能力も確認する必要がある。

2. 霊視覚事例の紹介

本章で、霊視覚者1名による霊視覚例を紹介する。1名であるが、視認数が多く、内容も多様であり、それぞれについて詳しい情報が得られたため、視認例として紹介するに値する充実度を備えている。

2.1. 霊視覚者本人について

この霊視覚者は、個人として特定されることを望んでおらず、それでいて以下に記すように本人の身体的・心理的情報は詳細に紹介する必要があるため、本人についての情報は人口学的情報も含めて省略し、以下「本人」とのみ表現する。この霊視覚者の情報として、前章で挙げた霊視覚について採用条件を含めた確認事項を以下に記す。

a) 虚言可能性

本人と筆者とは数年来の関わりがあり、個別に会話したことも数多い。その間、虚言癖的な嘘とわかる虚言は用いられなかった。また双方ともに霊視についてはまったく話題にせず、本人側から霊視覚者であることを能動的にアピールしていない。筆者が本人の霊視覚を知ったのは、たまたま筆者からオーラや氣の話をしたことがきっかけである。また本稿を執筆するにあたり、本人に共著者として執筆に参加する（当然氏名が明かされる）ことを打診したが、本人は個人が特定されることを好まず、申し出を辞退した。このことから、本人は霊視覚者であることをアピールする意思のないことが確認される。さらに、本人は心理学の専門教育を受けており、錯視や幻覚についても学術レベルの知識を備えている。

b) 錯視可能性

本研究の対象とする霊視覚者は、もとより錯視と混同するレベルの初心者ではない。上述したように本人も錯視現象には理解があり、錯視の可能性は本人自身が冷静に検討できる。さらに報告例において錯視の可能性がある場合は、その都度確認した。

c) 病理的幻覚可能性

本人は霊視覚経験中でもあった17-19歳の間、頭痛と貧血のため通院していた当時に頭

部CT、MRI、脳波の検査を受けたが、それらの結果に異常は見られず、てんかん専門医でもあった主治医によって、てんかんの可能性は否定されている。ちなみに頭痛の直接原因は赤血球が少ないことによる酸欠状態で、この症状が治まった20歳以降も霊視覚は続いている。また統合失調症の症状はDSM-5の診断基準に照らして認められず、アルコールやカフェインを含む薬物の嗜癖もない。

当時の頭痛は貧血によるものであるが、症状として「片頭痛」と診断された。片頭痛は幻視の原因の1つであるので、この影響については3.2節で検討する。

d) 視覚能力

霊視覚以前から本人は遠視・乱視であり、その後現在までレンズで視力矯正している。乱視検査では1本の線が複数本に見えるが、存在しない線が見えることはない。当然、眼科検診も受けており、視野欠損も見られないという。2.2. 節に紹介する自宅室内での霊視覚は裸眼での経験があるが、屋外での霊視覚は矯正レンズを通してしている。

他の視覚能力として、可視光外の紫外線あるいは赤外線領域が視覚に影響を与えているかを口頭で確認した（蛍光灯や炎の見え方が他者と異なっているか）ところ、そのような認識はないとのことであった。以上から、遠視・乱視はあるものの、緑内障・白内障・黄斑変性等、幻視をもたらすような末梢性の視覚機能の障害は認められない。

e) 心理傾向

数年間の対面経験から、本人のパーソナリティには、虚言癖を含め特異な傾向は見られない。霊的現象一般に対する親和性を確認するため、筆者が2023年に本人に回答を依頼した「日本人青年におけるスピリチュアリティ評定尺度」（濁川ほか、2016）の結果は、5因子中「自然との調和」「見えない存在への畏怖」「先祖・ルーツとのつながり」の3因子が、濁川らのデータにおける女性平均より1SD以上高い得点だった（他の2因子は「生きがい」「自律」）。「見えない存在への畏怖」は不可視の存在を認めていると解釈できるが、霊の存在に対しては、g) 項で示す態度である。

f) 霊視以外の経験

霊視覚以外の幻覚経験（霊以外の幻視、幻聴）について口頭で確認したところ、経験はないとのことである。また、宇宙人やUFOの目撃経験や写真における霊視の経験もないという。離脱体験的な夢を見たことは中学時代に一度あり、オーブ（光の玉）を見たこともあるという。本人のオーラ視は、他者やクリスタルなどの鉱物に対して可能である。筆者のオーラも見えとのこととそれを筆者の目の前で描画した（図略）。

g) 宗教・霊についての態度

本人の自宅の宗教は仏教（曹洞宗）であり、自宅に仏壇があるが、本人の宗教的関心は薄いという。また霊が実在すると思うかを尋ねたところ、「実在したら恐ろしい」と回答した。すなわち、霊の実在を信じてはおらず、自分の霊視覚経験そのものに対して不快に感じている（後述するように、視覚した霊に対する態度がそれを示している）。

2.2. 霊視の報告事例

上で紹介した本人の霊視覚例をこれから紹介する。本人の霊視覚は、10歳の学校行事での宿泊地が最初であり、以後25歳現在（報告提出時）に至るまで断続的に続いている（年単位での空白期間がない）。本稿での報告例は、本人が解説をつけて描画してきた13歳から25歳まで間の11例であるが、これらが霊視覚の全てではなく、霊視覚を経験してもすぐに忘れてしまうのも多くあるという。報告してきた霊視覚例を統一的に把握するため、それらに対してそれぞれ経験した時期、対象としての特徴・見え方、およびその時の覚醒度等について質問紙（選択肢）で回答させ、その結果をTable 1にまとめた。また図として示す描画は、本稿掲載用に本人が描きなおしたものである。

a) 報告結果の一覧

Table 1内のセルの記述は、主に筆者が作成した質問紙における回答選択肢の該当項目で、選択肢になかった本人からの回答には下線を付した。問いは、霊の現れ（見え方）がリアルな視覚対象にどれほど近いかという視点によるもので、選択肢に「リアルと同じ」という項目を入れた。Table 1を概観しても、見え方の多様さがわかる。

b) 11例の紹介

次に11例を個別に紹介していく。本人が描いたイラスト（Figure 1）とともに記された解説および筆者の個別の質問に対する回答を含む。11例を視認時期の古い順に示す。それぞれに本人原案の呼称をつけ、経験（出現）時期、頻度、場所を示し、説明を追加する。

①鴨居の顔

中学・高校の6年間、断続的、自室内の鴨居。

頭部と手のみで、顔の性別は女らしい。複雑な動きをした。

②鴨居の塊

同じく中高生の6年間、断続的、自室内の鴨居。

時期も場所も①とはほぼ同じであり、こちらも複雑な動きをしていた。ただしこちらは形状が抽象的のみである。①と②の両者は、大まかな出現時期と場所は同じであるが、実際には同時に出現したり、相互作用することはなかったという。また家族が同席していた時にも本人だけに見えたという。

③大きな顔

17～18歳頃、複数回、自宅浴室。

浴室の天井に見え、直径1.5mほどと大きい。性別は女らしい。

④モジャモジャ

18歳の時に1回。自室内のハンガーラックの服の間から自ら出てきた。

いたずらっ子みtainな印象だった。

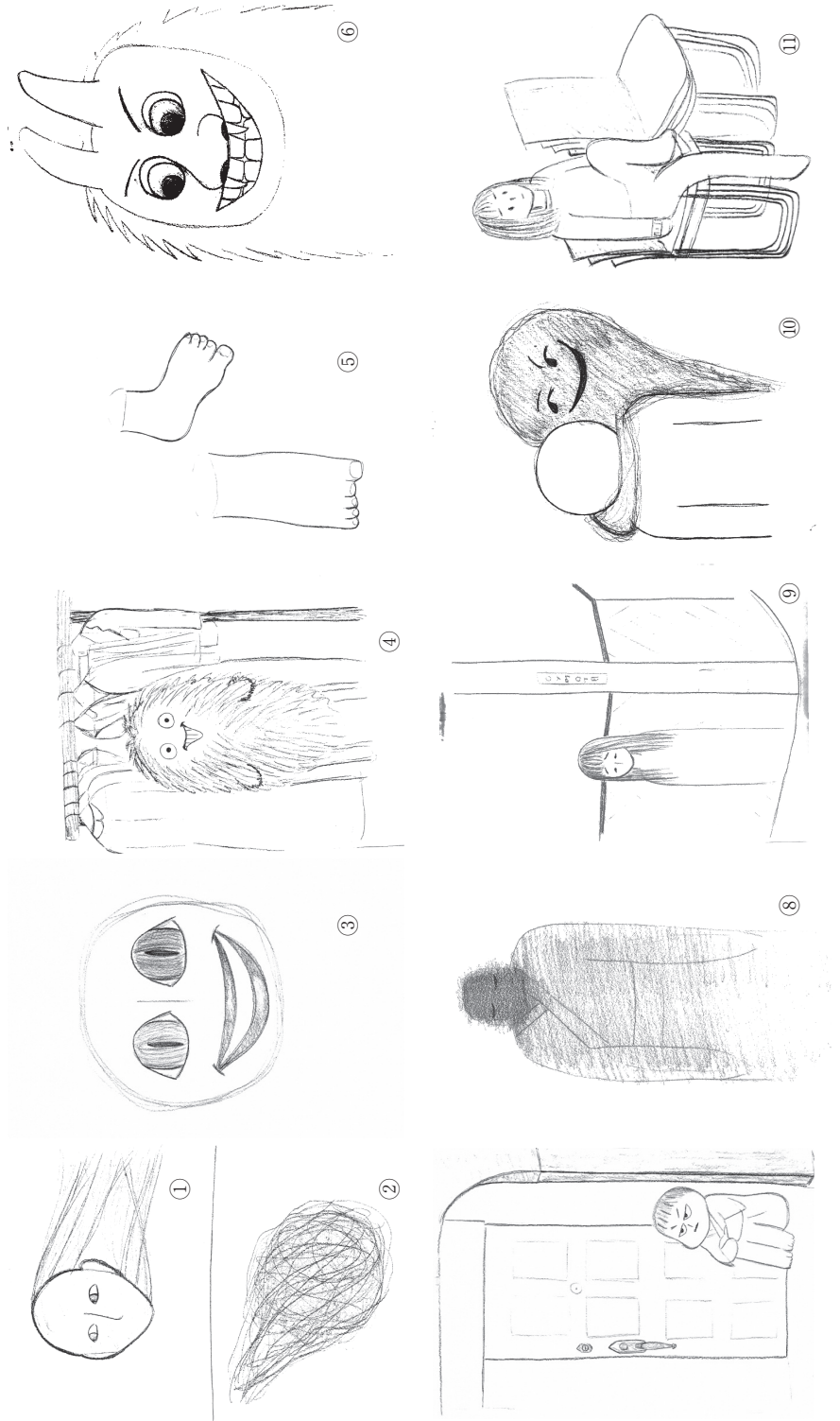
Table 1
霊視覚についての質問回答一覧

対象側	① 鴨居の顔	② 鴨居の塊	③ 大きな顔	④ モジャモジャ	⑤ 足先	⑥ 鬼	⑦ 小僧	⑧ 西郷	⑨ 路上の女子	⑩ 生き霊	⑪ 教室の女子	注	非該当の 選択肢
視認年齢	13-18※	13-18※	17-18?	18	18	19	20-21?	22-23	22-25	24	25	※断続的、? 不確か	
場所	自宅の鴨居	自宅の鴨居	自宅浴室	自室	自室	店内	自宅玄関外	自宅廊下	道路脇	対面相手	教室		
種類	人間	非生物	人間の仲間	化物	人間	化物	人間	人間	人間	人間の仲間	人間		
性別	♀(不明瞭)	不明	♀(不明瞭)	不明	不明	不明	♂	♂(不明瞭)	♀	不明	♀		
大きさ	人並	人の頭より大	大きい	人並	人並	人並	人並	大きい	人並	人並	人並		小さい(小人)
位置	浮遊	浮遊	地面から離れ	足が見えない	着地	ガラス越し	着地	着地	着地	地面から離れ	着地		不明
持続	すぐ消える	少しの間	少しの間	少しの間	しばらくいる	ずっといる	しばらくいる	ずっといる	ずっといる	ずっといる	しばらくいる		瞬間
身体性	一部	なし	一部	上半身のみ	一部	上半身のみ	全身	全身	一部欠損	上半身のみ	全身		
表情	無表情	無表情	特定表情が固定	口元に表情	無表情	勝手に変化	特定表情が固定	無表情	特定表情が固定	勝手に変化	特定表情が固定		こちらら合 わせて変化
視線	瞳あるが固定	目なし	こちららを凝視	こちららを凝視	目なし	瞳あるが固定	こちらの動きに 合わせて凝視	瞳なし	瞳あるが固定	瞳あるが固定	瞳あるが固定		こちら側に視線
透明度	半透明	少し薄い	リアルと同じ	リアルと同じ	リアルと同じ	リアルと同じ	リアルと同じ	少し薄い	少し薄い	半透明	リアルと同じ		輪郭のみ、ぼ とんと透明
立体感	凹凸がある	影がある	影がある	リアルと同じ	リアルと同じ	リアルと同じ	凹凸がある	厚さがある	リアルと同じ	凹凸がある	リアルと同じ		なし
色彩	一面一色	一面一色	薄い色	リアルと同じ	リアルと同じ	リアルと同じ	薄い色	一面一色	リアルと同じ	一面一色	リアルと同じ		なし
全体の動き	複雑な動き	複雑な動き	静止	複雑な動き	複雑な動き	上下、左右動	静止	静止	静止	静止	静止		なし、直線移動 / 旋回、こちら らに合わせる
再現性	有り	有り	有り	無し	無し	有り	無し	有り	有り	無し	有り		有り
音の随伴性	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し		
視認者側	覚醒水準	リラクセス	リラクセス	活動	活動	活動	活動	リラクセス	活動	活動	ぼーつ		うとうと、興奮
霊の根拠	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
異常な形態													
該当に○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
突然的な出沒													
空中浮遊	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
不明瞭	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

Figure 1

本人が描いた霊視覚対象

上段左から、①鴨居の顔（上）・②塊（下）、③大きな顔、④モジヤモジヤ、⑤足先、⑥鬼
下段左から、⑦小僧、⑧西郷、⑨路上の女子、⑩生き霊、⑪教室の女子



⑤足先

18歳の時に1回。自室内。

歩いてきて去っていった。すなわち本人との空間的距離の変化を与えている。本人は、幽霊には足がないと思っていたので、この出現に笑ってしまったという。すなわち、本人の霊視覚は潜在的に構成していた内的イメージの投影ではないことがわかる。

⑥鬼（のようなもの）

19歳の時に1回。アルバイト先の店。

店先のガラス越しに見え、丈は1.8cmくらいと大きめ。鬼といっても本人は秋田のナマハゲとバリ島のガルーダが混ざった形態のようだという。不吉な印象で、目を合わせないようにした。この霊の存在が、この場所の店が長続きしない原因だと思ったという。すなわち場所に対する霊力をもった憑きものと解釈している。

⑦小僧

20～21歳頃に1回、自宅玄関の外。

家にお化けがいるかチェックする方法を友人に教えられ、その時頭に浮かんだ像が、帰宅したら玄関前に体育座りをしていたという。すなわち、事前のイメージ表象の視覚化・具現化であり、しかもそれが能動的に家の前で帰るのを待っていた。記憶はあいまいだが、昭和初期のような服装（和装）をしていた。その位置から本人を睨んでいて、本人は関わりたくない（本人の霊に対する基本的態度）、無視して通り過ぎる際、本人の移動に合わせて、本人をずっと凝視していた。

⑧西郷

22-23歳の間、断続的、家内の廊下の片隅に北に向かって立っていた。

東京の上野公園にある西郷隆盛の銅像のようなイメージだったというが、歴史上の西郷隆盛の認識ではない。甚兵衛のような服装で丈は2mくらいと普通の人間より大きい。閉眼していて、同じ場所にただ立っているだけで、家族がその前を横切ったことがあるという（家族に霊視覚者はいない）。すなわち、三次元空間の奥行き（Z面）の特定位置にいたのである。

あまりに長期にわたって出るので、本人が霊に向かって「どこかに行って」と言ったが反応がなかったものの、いつの間にかいなくなったという。本人が能動的に関わり（ただし拒否的）を試みた唯一の例である。

⑨路上の女子

22-25歳の間、数回 近所の路上。

丈は140-150cmほど、すなわち等身大。自家用車の運転席の隣の席から見た。近所の道路の信号のない横断歩道のある「止まれ」の標識の傍らに、悲しそうな表情で一人で立っていた。顔が鮮明なので実在の人かと思ったが、首から下が不鮮明で、下半身はよく見えなかったという。この場所は曲がり角で、乗っていた車は徐行し、曲がる間ずっと見えていたため、一瞬の見間違いではなく、さらに車が曲がる間、角度が変化して見え続けたという。複数回見ているが、立っている位置が毎回1-2m異なっている点でも、本人は錯視ではないと判断している。

この場所は、見通しの悪い狭い道路ながら交通量が多いという。本例は立ち位置や表情、半ば不鮮明な形態からいかにも死霊的だが、本人の家族の言によれば、この場所で死者が出た交通事故は、過去30年間はないという（自転車と車の軽い接触事故が1件だけ）。

⑩生き霊

24歳の時1回、ある施設で対話中。

他の霊と異なり、本人が唯一「生き霊」と判断したものである。それは人間に悪意をもって取り憑いている霊（悪霊）という意味で、存命中の誰かの霊と特定したことはない。対話相手があまりに不幸続きなので、その人のオーラを見ようと改めてモードチェンジしたらこれが見えたという。これが見えたことで、対話相手はお祓いに行った方がいいと思ったという。またモードチェンジによってこのような系統の霊を見たのは初めてだという。

筆者の見解では、オーラを見るためのモードチェンジによるためか、確かに相手の体の外側に膨らんでいる形はオーラの形的だが、悪意に満ちた顔がある点が当人のオーラとは異なる。

⑪教室の女子

25歳、数回。

学校内の廊下を移動中、誰もいない教室の中に開いていたドア越しに見えたが、廊下を進んで同じ教室の次のドアから見たら消えていた。教室の後ろに積み重なっている椅子の上に座っていて、リラックスして脚を上下に開いている。年恰好はその学校に似そうな学生風である。この教室に他の人がいる時は見たことがない。廊下に沿って同じような教室が並んでいるが、見たのはこの教室だけである。

2.3. 霊視覚の総合的特徴

Table 1 と個別の説明をふまえて、11例について総合的な特徴を抽出してみる。

a) 多様性

まず、一人の視認例にもかかわらず、視認数、対象の形状、見え方ともにバラエティに富んでいて、数人分のデータに相当する（霊視覚数は個人差が大きい）。13歳の時から25歳まで、ほぼ毎年コンスタントに経験しており、特定の時期（例えば頭痛治療期間）に集中しているということはない。

形態：視認された霊はいわゆる怪談にありそうな定型的な形態ではない。実際の霊視覚は、霊についての（例えば幽霊のような）通俗的な出現パターン（姿、場所、時間等）ではないことは他の霊視覚者も指摘している（シークエンスはやとも, 2020a）。視認された形態は、異形の物から人間に近い姿、幽霊的、ほとんど人間、人体の部分、抽象的と多彩であり、人間とそれに近い場合の性別も男・女双方がある。

動き・位置：動きの有無では、動きのあるもの、ないものさまざまであるが、人間に近い形態は静止が多い。また本人側が移動に伴って見え方が変化するように（小僧、路上の女子）、霊の位置は視野面に固定されているのではなく、場所に固定されている（教室の女子）。この点が視野欠損による幻視や平面的な開眼夢とは異なる。

大きさ：等身大以上に巨大なのは「大きな顔」と「西郷」で、ある種の病理的幻視で見られる小人・小動物は見えていない。

リアリティ：「モジャモジャ」、「足先」「鬼」「教室の女子」が、透明度・立体感・色彩において「リアルと同じ」であった。11例において立体感・色彩のないものはなく、透明度が最も高い「半透明」なのは「鴨居の顔」と「生き霊」であった。その一方で、部分的に不鮮明（路上の女子）だったり、突然現れたり（モジャモジャ）、消えたりする（教室の女子）場合もある。報告例でないが雑踏の中で見た霊も、同視野にある実在他者との違いは、その不鮮明さにあるという。本人のいう「不鮮明」というのは、不透明ではなく、暗くて境界が分かりにくい状態をいう。

服装：「小僧」と「西郷」における時代遅れの衣装も特徴的である。この服装の異質性は他の霊視覚者でも認められる（柳澤 2010, シークエンスはやとも 2020a）。ただし「教室の女子」の服装は違和感のないものといえる。

再現性：一回と繰り返しと様々で、回数が一定していない。繰り返し見る場合は、場所が固定されているが（特に西郷）、「路上女子」のように、立ち位置などが毎回微妙に異なる場合もある。

出方：本人の前にあえて出現した場合（鴨居の顔～西郷）と、すでに出現している対象を本人が偶然見た（のように見える）場合（路上の女子、教室の女子）とがあり、最近は後者の傾向になっている。

視認モード：先述したように、「生き霊」はあえてオーラを見ようとモードチェンジをして初めて見えた。モードチェンジによって見えた霊はこれだけで、他の10例は自然に見えたものである。ただし、「鴨居の顔」「西郷」「路上の女子」は、2回目以降はモードチェンジした覚えがあるという。霊視覚とオーラ視との違いについては後述する。

b) 共通性

11例に共通した特徴があり、これは霊視覚そのものの特徴とみなせる。

音を伴わない：すなわち、対象の視覚経験のみ（聴覚、触覚なし）。これは大きな特徴である。

対象の方から働きかけがない：音声がなかったことから語られた経験もない。この相互作用のない点がいわゆる夢（健常者の日常的幻覚）とは異なり、これも大きな特徴である。対象との相互作用のなさは、本人側の消極姿勢のためでもあるが、「西郷」に対しての唯一の発言でも、相手側に直接の反応はなかった。対象側から積極性がみられたのは、「モジャ

モジャ」(本人の目の前にあえて出てきた)、「小僧」(本人を玄関で待ち構えていた)、「足先」は歩いて近づいてきた。

場所の日常性：個々の場所は異なっている、いずれも普通の生活空間で意外感をもって経験しており、墓地や心霊スポットのような霊を予感(期待・恐れ)する場所は1つもない。

c) 変化傾向

11例を時間順に見ていくと、変化傾向というものも見取れる。ただし、11例は霊視覚の全てではないので、ここで示す傾向性が正しいとはかぎらない。

形態の時系列変化：初期(高校生までの頃)は部分的・非現実的形態だったのが、最近になるほどリアルな人間に近くなっている。化物から幽霊にという変化ともいえる。ただし後者が死霊である可能性は低い。

自宅内から外へ：初期は自宅内ばかりで、自宅の中でも特に鴨居と風呂場は視認しやすい空間があり、そこを結んだ線を本人は「霊道」(霊の通り道)にあたっていると解釈している。霊道の上の2階相当の場所が本人の部屋でその霊道上で「足先」と「モジャモジャ」を見ている。また20年ほど前、隣家の人がその霊道に沿った窓付近に霊が出たというので蓋をしたという。ちなみに霊道の延長上に病院や斎場などの施設はない。ただ、最近では自宅内ではなく、外の空間で見えるようになっている。

d) 霊と判断した根拠

これらを霊と判断した根拠は、Table 1から、霊によって異なり、対象の現れ方が霊判断に影響していることがわかる。すなわち、形態の異質性(形態、大きさ、人体の部分であること)があればそれだけで霊と判断され、形態が正常に近い場合は、突発的な出没や不鮮明という見え方(様式)の異様さによっている。すなわち、霊と判断=形態もしくは見え方が異質という図式である。

e) 本人の状態

霊視認時の本人の覚醒水準はいずれも平常の範囲内であり、またいずれも日常生活を営んでいる場面で、健常者でも幻視を経験しうる特殊な心身状態下(入眠状態/疲労時)ではなかった。

3. 批判的検討

以上の霊視覚経験について批判的に検討していく。まずここで紹介した霊視覚現象は、現実の他者・想像・夢見のいずれでもないことは、その現れの様態から確認できる。

3.1. 錯視の可能性の検討

いずれも“一瞬見た霊らしきもの”ではなく、持続時間や再現性より、本人が錯視でないことを充分確認できるものである。第3者の視点で錯視の可能性がありそうなのは、家の壁面に出たもので、「鴨居の顔・塊」は、複雑な動きを示す点で錯視とはいえない。浴室の「大きな顔」は、瞬時の錯視(壁面の模様などによる)ならあり得るが、複数回見て

いれば、錯視ならそれに気づくものである。

残像視の可能性としては、生き霊に残像視に近いオーラの形態が見られるが、人物とは別個の顔がある点で残像ではない。

以上から本例のいずれの対象も、通常の錯視によるものとみなすことは困難である。ただし、霊視覚につながる固有の（未知の）錯視の可能性は残しておく。それも含めて錯視でないと断定するには、霊視覚の現場での第三者による確認が必要である。

3.2. 幻視の可能性の検討

高頻度でさまざまな空間での霊視覚の場合は、対象側の刺激特性に基づく錯視よりも、本人側のコンディションによる幻視の可能性の方が高い。既知の幻視は病理的原因によるものとされるが、先述した本人の健康状態から精神障害および脳の器質疾患的幻視の可能性は否定される。さらに本人に、てんかん以外について、頭部外傷、覚醒時に記憶が飛んでいる経験（てんかん小発作）、乱視以外の視覚障害、睡眠障害いずれもないことを確認した。ただし霊視覚期間と重なる片頭痛による幻視の可能性が残るので、これについて改めて検討する。

a) 片頭痛による幻視の可能性

17-19歳の3年間患っためまい・貧血を伴う頭痛は片頭痛と診断され、頭痛薬（主にカロナール、ストマリプタン）での治療、その後は貧血治療として鉄剤による点滴・錠剤治療を受けていた。片頭痛は幻視の原因の一つであるが、その幻視は特徴的で幾何学模様であるという（Sacks, 2012 大谷訳 2014）。実際、本人は通院先の医師に「めまいと一緒に歯車のようなものがゆっくり動いて見える」と言うと、医師は「典型的な片頭痛の症状だ」と答えたという。ただし、本人によると、この場合の「見える」は、視覚的ではなく、頭に浮かぶイメージあるいは飛蚊症のように視界の内側に見える感覚に近く、霊視覚のような外在的な見え方とは異なるという。さらに短期間で消失し、以降は見えていないという。すなわち、片頭痛に伴うこの経験は、霊視覚とは“現れ”が質的に異なっていて、幻視というレベルにも達していない。また片頭痛治療と期間が重なる鴨居の2つの霊視覚は、頭痛時ではなかったという。というのも、その頃の頭痛発症時はまともに起きていられなかったためである。さらに、霊視覚は治療期間外（治療終了後）にも数多く経験している点で、片頭痛とは期間上の対応性がない。以上から、本人の霊視覚を片頭痛による幻視に帰すには無理がある。

b) 視野欠損に伴う幻視との共通性

むしろ、本人の霊視覚は、シャルル・ボネ症候群（Charles Bonnet Syndrome）及び半盲と共通点がある。シャルル・ボネ症候群は、黄斑変性や緑内障などによる視野欠損によって発生する幻覚で、外部空間に出現するが、幻覚者との相互作用がない。感情を伝えることも引き起こすこともない、見えるだけで音にも触覚もなく、そして本人が幻覚だと認識できるという（Sacks, 2012 大谷訳 2014）。

また、半盲あるいは半盲視野内幻視（山鳥, 1985）も、欠損視野内に人物などの幻視が出て残りの視野と融合し、視覚像のみで音声を伴わない。数週間も続くことがある。ちな

みに小出ら（2020）は、腹側皮質視覚路（視覚的な“気づき”に関与）の損傷によって、視野欠損がなくても幻視を見た症例を報告している。

これらの疾患は、末梢からの視覚情報入力欠損に対応する中枢からの補填といえるもので、明確な器質的原因がある点で、本例の霊視覚の説明にはならない。ただし、現れ方に本例の霊視覚と共通点があることから、両者には腹側視覚路あたりに何らかの共通する現象があるかもしれない。

c) 開眼夢の可能性など

また健常者の覚醒時の幻覚ともいえる開眼夢の可能性については、視認時の覚醒度に「うとうと」状態がないことと、動きや立体感があり、二重視野状態でもないことから、開眼夢のような入眠時の幻視ともいえない。また視点を变えて、霊が心的イメージの投影像である可能性を探ると、例えば「足先」は保持していた幽霊イメージと異なることから、その可能性はないといえる。他の例においても、事前に想像していた「小僧」を除いて、記憶像の投影ではない。

以上の検討から、本例の霊視覚を既知の病理的幻視とみなすことはできない。

3.3. psi現象の可能性

本例を錯視でも幻視でもなく、普通の人には見えない視覚経験とした場合、それはpsi（サイ）現象の一部であるESP（超感覚的知覚）の一種の可能性となるか。ESPは通常の知覚能力の延長ではないので、乱視など視覚にハンディがあっても問題ない（大谷, 1985）。ただし予知や透視のように知覚対象が第三者にも確認できるものではない。もっとも本人は、いわゆるpsi能力（予知、透視、念力）はないとのことである。大谷（1985）によれば、超心理学においても霊の存在は認められていないが、（霊視覚現象に相当する）偶発的psiは実験に比べて現れ方が強烈であるという。数あるpsi能力の中で霊視覚に近いのは「ESP投射」という現象であろう。これは、誰かが遠方の人物の目の前に現れようと念じるとそれが実現する現象で、投射元が生きていることが条件となる。ただし本例では、いずれも本人が投射を念じたものではないことから、霊視覚はpsi現象とはいえない。

3.4. オーラ視との関係

本人は霊視覚のほかオーラ視もできる（どちらか片方だけ見えるパターンの方が多い）。本人がオーラを見る時は、一旦意識を集中して、目力を抜いて周辺視状態にするという。これはオーラ視の教本（井村, 2013）での見方と一致している。霊視覚とオーラ視との共通点は、本人によれば、「視ようと集中すること」であり、相違点は、一般的には、霊視の場合は対象が飛び込んでくるように突然認識されるが、オーラ視ではそのような見え方は圧倒的に少ないという。ただし「生き霊」の場合は、オーラ視にモードチェンジして初めて見えている。また、6.2で紹介する「霊感があり手で祓える」という友人母はオーラを視たことがないそうである。先述したように霊視とその霊を祓う（霊に対する能動的関与）能力は別であることから、霊視覚、霊の祓い、オーラ視の3つはそれぞれ（排反的ではないが）独立した現象といえる。

4. 霊視覚現象は幻視なのか

本稿で紹介した霊視覚は、本人にとってはリアルな視覚対象と同レベルのリアリティ（色彩、立体感、動き）があり、しかも瞬間的な経験ではなく、長時間あるいは繰り返し経験されることがわかった。ただし、視覚のみで音声ともなわず、相互行動やコミュニケーションは取れないという点で、夢や実在の他者と異なる。それらを批判的に検討した結果、虚偽、錯視、病理的幻視に帰することはできなかった。ただし、特に幻視の可能性は完全に否定されるものではなく、既知の症状がない健常者でも経験しうる未発見の機序による幻視の可能性は残しておく。霊視覚での現れ方が、視野欠損の幻視と複数の共通点があることがその可能性を示唆している。というのも、幻視は、健常者にとっても経験のハードルは意外に低そうだからである。Ramachandran（1998, 山下訳 1999）が「私たちが知覚と呼んでいるものは、どの幻覚が現在の感覚入力にもっともよく適合するかを判断した結果なのである」と述べているように、（錯視だけでなく）幻視も、本来的に病理現象ではなく、視覚のデフォルトとさえいえるからである。

本例も含めて霊視覚者は、あるきっかけから霊視ができるようになることが多い。これに関連しそうな現象として、身体感覚の錯覚であるアリス症候群は、脳神経の損傷などの器質的問題ではなく、学習の完了した特別な神経細胞ネットワークによるのではないかという（小鷹, 2023）。このことから、霊視覚も、何らかの偶発的作用による脳内ネットワークの形成によるものかもしれないが、その確認は霊視覚者に対する神経学的な研究に委ねるしかない。

5. 今後の課題：霊であるかの確認作業

本稿においては、主に幻覚（霊視ではない）の視点から批判的検討がされたが、霊の実在を認める（幻視ではない）心霊科学の視点からの批判的検討はなされていない。今後はその視点を加えて、新たに霊視覚のデータを採取する必要がある。

5.1. 実況データの収集

まず必要なのは、データの信頼性を高めることである。今回の報告例はすべて過去経験の報告であるため、記憶による変形を受けていることは否めず、記憶像のデータは、それだけでデータとしての信頼性が落ちるため、長期記憶に頼らない新鮮な実況データが必要となる。霊視覚者が霊視覚を経験しているその場に同席して、以下のデータを採取したい。霊視覚空間の視認：その空間に何が見えるかの確認。とりわけ錯視原因となりそうなものの確認が必要。目視だけでなく静止画・動画撮影をして、事後に詳細な確認をする。霊視覚空間の物理測定：通常空間と異なった状態にあるのかを物理学的に確認する。とりわけ、可視光外の周波数の電磁波測定が必要。霊の探知に使用されている交流電波（ラジオ波）だけでなく、パワースポットの計測に使われる直流磁気（地磁気）も計測する。実況報告：霊視覚者にその場で言語的・描画的記述をしてもらう。

以上に加えて、霊視覚が幻視か視覚かの確認として、視認中の網膜～視覚中枢の神経学的反応を確認したいが、残念ながら筆者の力量を超える。

5.2. 複数の霊視覚者間での“客観性”の確認。

霊視覚の客観性を確認する別の方法として、霊視覚者間での相互主観性すなわち限定された範囲での“客観性”の確認も試みたい。すなわち、霊視覚者間で、同じ霊を視認できるのかの確認である。そのためには元々希少な霊視覚者を2人以上同時に集める必要がある。そして、同じ空間での少なくとも1人の霊視覚対象に対して、(相互影響がないように)互いに独立して実況反応を採取する。

実は本例の本人はすでに他の霊視覚者との共通経験をしている。まずは10歳の時、自称「靈感がある」友人と本人が同じ場所と時間に、似た特徴の霊を認識したことがあるという(これが本人の最初の霊視覚経験)。また、ずっと後になって本人が出先で別の友人に霊が憑いていることを視認し、友人が帰宅後にその友人の母も霊を視認し、その霊を祓ったというものである(友人母は、元々靈感があり手で祓うこともできたという)。この時、本人には友人に憑いている霊が黒いもやもやの塊のような不明瞭なものだったが、友人母にはリアルな腕が見えたという。この例から、霊視覚者間で共に霊視覚はできても、見え方は異なる可能性はある。また霊視覚が視覚神経系の過程による幻視なら、祓いという非視覚的行為によって霊視覚が影響を受ける理由が説明できない。

以上の実況の確認の実現は困難を極めるが、このような機会を設定することが、この現象に対する中立的で科学的なアプローチといえる。

注

- 1) 本稿を人文科学篇に投稿した理由は、霊の存在を否定する(自然)科学的スタンスを前提とせず、そのスタンスすらも批判の対象とする現象学的スタンスに立つためで、得られた語りを所与とする民俗学的スタンスに立つためではない。
- 2) コミックスはそのメディア的性格上、フィクションや誇張表現が前提となっているため、できれば引用は避けたいが、本稿の話題を最も多く扱っているメディアでもある。

引用文献

- Andrews, T. (2005). How to See and Read the Aura. Llewellyn Worldwide. (アンドリューズ, T. 伊藤綺(訳). (2005). あなたにもオーラは見える 成甲書房)
- 井村宏次 (2013). オーラ能力開発法, 実践講座 15. ビイグ・ネット・プレス
- 伊藤三巳華 (2018). 『見えるんです』1巻 朝日新聞出版 電子版
- 伊藤龍平 (2007). 「陰陽眼の少女」—現代台湾の鬼の噂—, 『霊はどこにいるのか』所収 一柳廣隆・吉田司雄 青弓社
- 加門七海 (2007). うわさの人物—神霊と生きる人々— 集英社
- 小出眞悟・畠山公大・上村昌寛・菊池文平・長谷川仁・小野寺理 (2020). 一側視野に局限した複雑幻視を呈した硬膜動静脈瘻の1例 臨床神経 60 425-428
- 美輪明宏 (2004). 霊ナンテコワクナイヨ PARCO 出版
- 濁川孝志・満石寿・遠藤伸太郎・廣野正子・和秀俊 (2016). 日本人青年におけるスピリチュアリティ評定尺度の開発 トランスパーソナル／精神医学 15(1) 87-104.
- 小鷹研理 (2023). からだの錯覚—脳と感覚が作り出す不思議な世界— 講談社

大谷宗司 (1985). 超心理の世界 図書出版

Ramachandran, V. S., and Blakeslee, S. (1998). *Phantoms in the Brain: Probing the Mysteries of the Human Mind*. New York: William Morrow. (ラマチャンドラン, V. S., ブレイクスリー, S. 山下篤子 (訳) (1999). 脳の中の幽霊 KADOKAWA)

Sacks, O. (2012). *Hallucinations*, The Wylie Agency Ltd. (サックス, O. 太田直子 (訳) (2014). 見てしまいうびと—幻覚の脳科学— 早川書房 (電子書籍版)

シークエンスはやとも (2020a). ヤバイ生き霊 光文社

シークエンスはやとも (2020b). 霊が教える幸せな生き方 KADOKAWA

山根一郎 (2020). 白昼夢 (開眼夢) というものを見た, 山根一郎ブログ「今日こんなことが」 2020年7月25日記事 (<https://blog.goo.ne.jp/yamane1/e/f7c7ed89bae1435c6c53fc6e215fc034>)

山鳥 重 (1985). 神経心理学入門 医学書院

柳澤 諒 (2010). 神様ではないけれど—霊が見える, 未来がわかる— 木楽舎